# 同窓会会報

第12号

2015 年 10 月

金沢大学理学部

物理学科同窓会

# 目　次

ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
特別講演講師ご紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
特別講演概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
「走査型トンネル顕微鏡/非接触原子間力顕微鏡で
捉えるナノサイエンス」　　金沢大学 新井豊子 教授
人生紀行文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
赤レンガ学舎の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
千田 勘太郎 先生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
現役幹事たちの回想録・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
物理学教室ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
会則変更のお知らせと新会則の案・・・・・・・・・・・２１
同窓生名簿（名簿の記載情報について）・・・・・・・・・２３
同窓生名簿（物理学科・物理コース卒業生）・・・・・・２４
同窓生名簿（大学院修士課程・博士前期課程修了生）・・３８
同窓会役員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

この会報は金沢大学理学部物理学科同窓会の会員相互の親睦と連携を図る目的のために発行するものであり、会員以外の使用および本同窓会の目的以外の使用を禁止します。

# ご　挨　拶

物理学科同窓会会長
安達　正明（昭和４９年卒）

金沢大学物理学科同窓会では５年毎に金沢で同窓会総会を開いております。特に今回は総会に合わせて１５年ぶりに、この同窓会会報（第１２号）を再び発行しました。

私を含め年配の同窓会員にとっては、電子ファイルよりも紙に印刷した会報の方が利用するのに都合が良いのではないかと、役員で判断しました。また内容に関しましても、これまでと同様に同窓会役員経験者に、当時の物理学科同級生や指導教官等との思い出、さらに卒業してからの同窓の先輩や後輩との思い出等を語って頂く事で、昔の同窓生の気風や、時に沿ったその変化、今の学生にも息づくであろう、物理の学生独特の個性なども感じていただければ、これに勝ることはないと思いました。そこで、第７期生の河田脩二先生のご協力を得て、同窓会会長経験者や旧役員の方々に、思い出を是非語って頂きたいと御願いを致しました。一方で、現在の同窓会役員の皆さまにも自己紹介を兼ねて、学生時代等の思い出を書いて頂きました。

ところで時と共に世の中が変わるのは必然でしょうが、大学でも色々な変化が進みつつあります。ご存知のように国立大学は平成１６年度の独立法人化後１１年が経過しました。当初は目立つことのなかった学長のリーダーシップが、文科省の強い指導で今や非常に強く働く組織へと変貌を遂げつつあります。金沢大学でも今の学長（２年目）は従来の延長では予想できなかった速度で組織変革を進めつつあります。昨年はスーパーグローバルユニバシティーのタイプＢ（グローバル化牽引型）を申請して文科省に認められ、現在申請計画に沿った動きを急いでいます。さらに今年文科省は２８年度からの第３期中期目標期間を前に、新たに「国立大学法人の目指す姿」に関して３種類の機能強化に関する重点支援枠を示し、各大学が何れかの枠を選択することと、その枠内での新たな取り組みを示すことを求めました。これに対しても学長は驚くようなトップダウンで、リスクも伴う最も競争の激しい枠での取り組みを選択しました。学長は私と同じ１９７０年に金沢大学へ入学した工学部出身ですが、理学部の自由な文化で育った私には、これらの取り組みが何となく私立大学をも飛び越えて、企業のような管理運営をしようとしているように見えます。

我々の学生時代は城内にキャンパスがあった頃であり、市民に支えてもらいながら色々な発想や自由を謳歌していたとの記憶があり、伸び盛りの青春時代と重なって貴重な楽しいイメージとして強く残っています。またそんな中で活発に議論をし、勉学や遊びや行動を通して成長し、広い社会の領域へ特徴ある多くの人材を輩出してきたとの思いがあります。特に物理学を専攻した人たちは自分の頭で納得がいくまで考える学生時代を経て、自分の視点を他人以上に持っていると思います。少子高齢化、巨額の財政赤字などから将来が見えにくい時代です。それ故に、同窓生の皆様が自分なりの視点を活かし、各界でさらなるご活躍をされますことを期待して、簡単ですがご挨拶に代えたいと思います。

平成２７年１０月３１日

## 特別講演講師ご紹介

## 新井豊子教授のご紹介

幹事　古寺　哲幸（平成１３年卒）

新井先生は、２００７年３月に金沢大学･理学部物理学科の教授として着任されました。ご専門は、走査型プローブ顕微鏡を駆使したナノメートルおよびサブナノメートルスケールでの物性測定で、顕微鏡技術をご自身で開発されながらナノサイエンスの物理学の世界を開拓されています。また、本同窓会では、卒研生の研究発表会において、特に優秀な発表をした学生に学術特別賞を贈呈していますが、新井先生が指導されている卒研生は例年受賞されていています。これは、学生の指導にも非常に熱心に取り組まれておられることの証しといえます。今後も、最先端の科学分野を切り開きつつ、後進の育成を通して、金沢大学の物理学コースの発展にますますご尽力いただけることと思います。

主な公的活動：人材育成・男女共同参画委員（応用物理学会）
受　賞　歴　：平成１６年度ナノプローブテクノロジー賞

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

**特別講演概要**

## 走査型トンネル顕微鏡/非接触原子間力顕微鏡で捉えるナノサイエンス

ナノ物理学研究室　　　新井 豊子

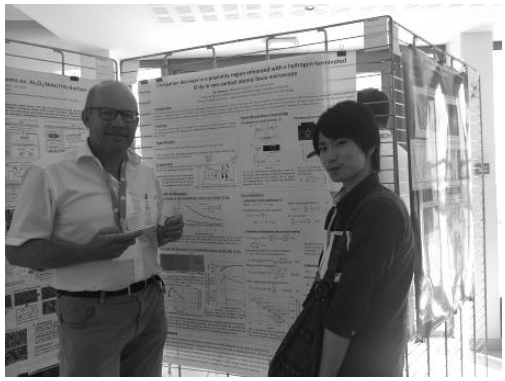
2007 年 3 月に新井が理学部物理学科教授として着任して、ナノ物理学研究室はスタートしました。同年 4 月に新 4 年生（ナノ研 1 期生）を 3 名迎え、本年 3 月に卒業したナノ研 8 期生までで 26 名を卒業させることができました。本年も、4 名の 4 年生がナノ物理学の研究を始めました。4 年生の課題研究(卒業研究)で、ナノ物理学研究室に入った学生のほぼ全員が同研究室の大学院博士前期課程に進んでいます。現在は、博士後期課程まで含め、10 名の学生が、最先端のナノ物理研究に邁進しています。ナノ物理学と言っても何を研究するのだろうと思われるかも知れません。「ナノ」は、「ナノメータ」の意味で使われていて、ナノメータおよびサブナノメータサイズの原子や分子の量子力学的振る舞いを研究する新しい研究領域です。その中で、当研究室で、装置開発から始めて、未知のナノ物性探査に用いている走査型トンネル顕微鏡（STM）や原子間力顕微鏡（AFM）についてご説明します。

1980 年代に STM と AFM が発明されて以来、その原理を応用して多様な走査型プローブ顕微鏡（SPM）が開発されてきました。「先端が鋭利な探針を試料に近接させ、そのとき探針と試料間で授受される物理量（2 つの物体間の距離に依存する）を一定に保ちながら探針を走査することによって表面像を得る」という SPM の原理は非常に単純です。その単純さと“原子が見える”という特筆すべき性能が多くの研究者達に様々なインスピレーションを与え、それ以前は理論的に想像する世界でしかなかったナノメータの世界を実測できる世界に変えました。2 つの物体（試料と探針）間の位置を原子スケールの分解能で制御できる “SPM”は、「顕微鏡」の名を持ちながら、ナノスケールの表面観察法に留まらず、ナノスケールの物性測定法や原子･分子操作技術にまで飛躍的に進歩してきました。今や SPM は、ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究の最先端の研究・開発ツールとして、また、既に不可欠な汎用装置の一つとしても活躍しています。本講演では我々が独自開発してきた非接触原子間力顕微鏡（nc-AFM）を用いたナノ力学的分光手法を中心に解説し、近年、

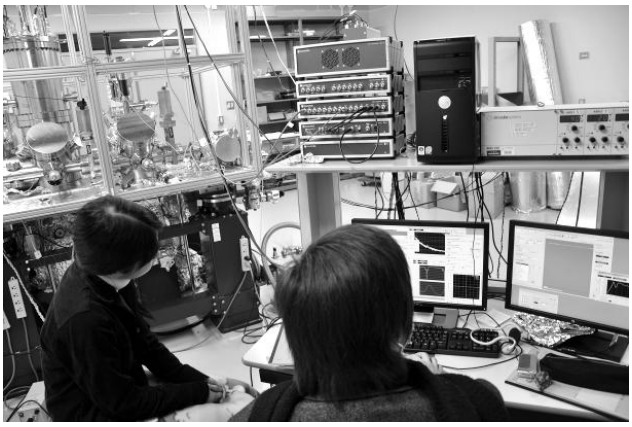
水溶液中でも原子・分子分解能を達成し、超高真空（UHV）室温環境下で原子操作に成功した nc-AFM（FM-AFM とも呼ばれる）のトピックスを紹介して、新たに見えてきたナノサイエンスの世界を概観します。

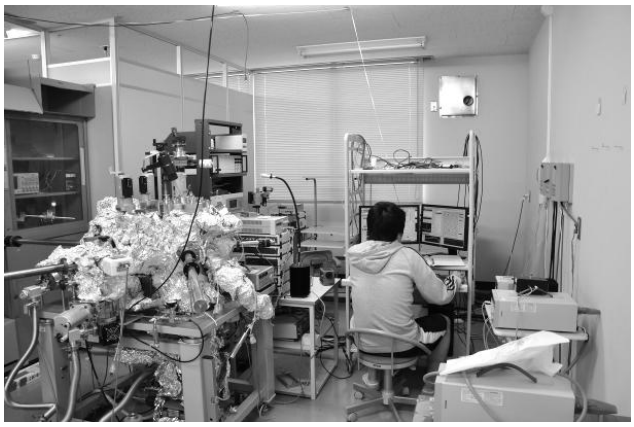
我々は、走査型プローブ顕微鏡法（SPM）ファミリーのなかでも原子分解能を有する UHV STM や UHV nc-AFM および、それらの複合機を独自開発してきた。さらに、これらの独自開発装置を用いて、走査型トンネル分光法(STS)を基に、極近接させた探針と試料の間の印加電圧を掃引することによって探針-試料間の相互作用力を分光できる手法（非接触原子間力分光法：nc-AFS）を開発した。本手法では、相互作用力とともに電流変化、散逸エネルギーも同時計測できる。nc-AFS によって得られた結果は、ダングリングボンドを表面にもつ二つの凝縮系物体を極接近させたうえで印加電圧を変化させて静電エネルギー的にチューニングすることで、それぞれの表面電子準位からなる共鳴状態（共有結合）を形成できることを示唆した。また、nc-AFS を基にした相互作用力と電流の同時測定は、近接した２物体間のトンネル障壁の崩壊過程を評価し、電子伝導と相互作用力の相関を解析できる可能性を示した。トンネル障壁が崩壊するほどの近接した状態での電流-電圧特性の測定は STM では容易ではなく、相互作用力を利用して距離制御ができる nc-AFM でこそ実現できたものである。また、電流（すでにトンネル電流とは言い難い特性を持つ）の距離依存性から表面電子状態の解析ができる点は 2 つの物体の接触時の物性発現の機構に繋がると期待できる。一方、本手法で同時計測できる散逸エネルギーの主因は未だに議論が収斂しているとは言い難い状況である。しかし、探針-試料間印加電圧によって明確に変化する成分がある。これは古典的には 2 電極間の変位電流に基づくジュール発熱を想定すれば理解が進む。カンチレバーの振動によって表面に誘起される電荷が変化し、この変位電流が探針-試料を介した回路ループを流れることによって発熱し、機械的振動エネルギーが失われる。探針が試料に極接近すると、表面誘起電荷が古典的な静電気学によって予想される振舞からずれる傾向がある。表面電子の量子効果の挙動が問題となる。逆説的には、本計測が 2 物体が接触直前の界面電子状態を解析する手法となると予想される。

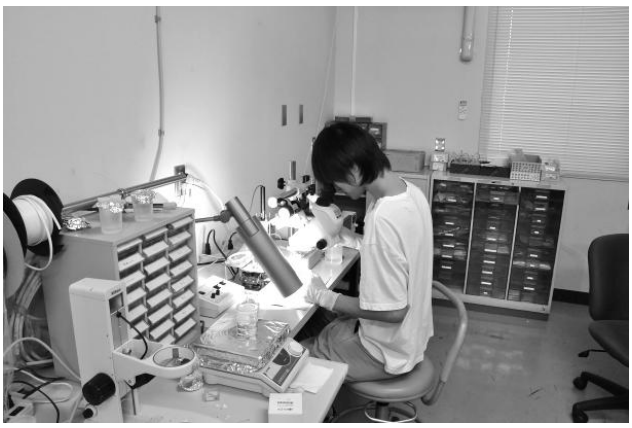
ナノ物理学研究室では、これらの、研究成果について、博士前期課程の学生でも海外で開催される国際会議で発表させています。右の写真は、今年 9 月にフランスで開催された非接触原子間力顕微鏡国際会議で、M1 の稲村君がポスター発表している様子です。



以下の写真は、研究室の風景と、2010 年に金沢駅前の石川県立音楽堂で、非接触原子間力顕微鏡国際会議(ncAFM2010)を開催したときの写真です。ncAFM2010 会議の運営では、研究室の学生たちが頑張ってくれました。







邦楽ホール

NC-AFM2010
13th International Conference on Non-Contact Atomic Force Microscopy
167 Committee Satellite Workshop on SPM

# 人生紀行文

河田　脩二（昭和３４年卒）

幹事会から歴代会長に寄稿を依頼するので、添え書きを願いますとの依頼があり、拙文を出したので、今度のやくわりは終えたと思っていたのに、寄稿が少ないので一つ書いていただけないかとの追加要請があり、少し考えが浅はかだったと後悔したが後の祭り・つたない“文”を書く羽目になった。依頼文の中でも書いたように昔の学生生活の雰囲気を再現するのも、最近の恵まれた環境での勉学と比べてあらゆることに辛抱と創意工夫が必要だったことを思い、私的なことも含めて２・３の駄文を連ねてみた。

（入学の動機）

大学から合格通知をもらって迷ったことは、既に合格していて採用面接の案内を数箇所からもらっていた測候所(今の気象台)からの採用面接案内との天秤を使うことであった。家は貧しく学費をどう捻出するかも考えねばならず、元々富士山測候所勤務を志していたこともあり苦悩したが、気象は物理学が基本にあり、且つ山や海洋との関わりが深い分野だから、より深い思考過程を耕した後に進めばよいのではないかとのある人の助言もあり貧乏学生へのみちを選ぶことになった。入学式の際にどんな服装で望んだかは記憶にもないし、証拠写真もないので分からないが大学生らしい服装でなかったことは確かなようだ。片道２時間余を要して弁当持参で金沢までの朝星・夜星の通学の毎日を過ごした時間が懐かしい。この時間が読書の時間で近眼になる原因とも知らず過ごした。駅から大学までは市内電車はあったが勿論歩きである。講義は全て真新しく内容も新しいことばかりで毎日が嬉々としたものだった。物理学を学べることに幸せをかんじる毎日であった。

(富士登山)

７年前の７５歳の誕生日に、ふとした縁で富士登山のグループに参加させてもらい、金沢支部からはＩさんと二人だけ火口壁に近い浅間神社前から気迷いしながら強風の中でお鉢めぐりを強行した。狙いは昔憧れた今は無人の富士山測候所の地を踏むことだった。年寄りの冷や水である。朝日に輝く？影富士を堪能したり、火口の途中まで下って壁を観察したり、グループの人々と遅れること小一時間、憧れの心の地をふんだ感慨にふけりながら下山の道を急いだ。翌日の朝、晴れた北の空にくっきり浮かぶ富士の姿を眺め憧れの地にたどり、その地を踏んだ感慨をもう一度思い出しなおし、往時の思いを再び新たにした。

入学後は大学での講義が全て新鮮で新しい知識が毎日増えるのがめッチャ楽しく、物理はともかく社会学や文学までが嬉しかった。高校時代３年生のときに拾得した早稲田式速記術を駆使して、当時壇上でノートを読むだけだった先生の言葉を必死に書き取り、汽車中や家へ帰ってからは翻訳に取りくんだものだ。翻訳した心理学のノートは今も大事に保存してあり、その努力に頭が下る。冬になると講義室には真ん中に石炭ストーブが置いてあり、朝、用務員さんが石炭と火種を入れていくのだが、うまく着火せず冷たいストーブを横前に見ながら、S 先生の講義と黒板の数式を悴む（かじかむ）手で必死にノートしたものである。勿論教科書なるものはなく、理解はノートが頼りであって誤植は許されなかった。何もない中で頼りになるのは同級生諸氏である。H先生の量子力学が分からないということで、寒い空き講義室を使って自分たちで海賊版の Shife の Quantum Mechanics を輪講したのもその時解ったわけではないが懐かしい。K君は実業を経験したせいか、ストーブを炊くのが上手であった。彼が当番になるとストーブは赤々と燃え、暖かい教室で聞く講義は快適であった。がその内火勢が弱くなりストーブが冷えて来ても他の我々は手をださず、寒くなった彼が目を覚まして手を入れるまでガマンしたものである。それほど講義が良かったということか？

（ニュートン祭と変遷：写真１～８）

２年生の冬にはニュートン祭があり・初めて上級生と会うことになった。旧の(今は存在

しない)学生実験室をかたづけ先生方も同席して、クイズや演奏や演劇などで夕方から一晩を過ごすことが恒例化していたのを記憶している(数年後の祭の写真数枚；教授・会長の挨拶・その他の一部)。３年になると当概年学生が準備を担当し、恒例として３年が舞台上で演劇をやらねばならなかった。クラス内の議論の末、今年は劇はやらないと４年生に申し込んだら、お前等はニュートン祭をぶっ壊す気かと一喝され、その剣幕にすごすご引き下がったことを記憶している。

このころはまだ同窓会なる意識もない時代であったと思う。その後、懇親宴会だけより幅広い催しに広げようとの機運が高まり、バレーボール大会等も開かれ、優勝杯なども作られた（今もどこかにあると思うが)。更に今度は、簡素化復活や付加事業などと変遷（名称もニュートンコンパ→付加(優秀卒研表彰物理同窓会贈呈)と近代化？されてきている。

（同窓会誌）

卒業生が増え、物理同窓会の機運が高まって会が発足したのは１９５７年のこと、６回生のときであった。８年には創刊号が発行されその形が整った。会誌はＳ５９・Ｓ６０・Ｓ６３・Ｓ６５・Ｓ６７・・とほぼ隔年に発行された。私が関係したのはＳ６０年（第２号）からである。幹事会の体制が整わないまま、一部の人たちで会誌発行が支へられて行った。

（３８豪雪：写真９、１０）

忘れもしない３８(昭和３８年:１９５８)年正月･今夜は徹夜の実験になるとの予定で、夕方兼六園へ雪中散歩に出かけた。雪がかなり激しく降っていて今晩は積もりそうだと思いながら帰室した後は、外は時が静かに過ぎ、徹夜の実験も無事終わり、さて朝飯にしようと戸外へのドアを開けようとしたら、ドアの中ほどまで雪が積もっていてドアが開けられない。これが３８豪雪のはじまりであった。毎日のようにドカ雪が続き下宿と学校の徒歩往復のみならず、毎日学内の除雪と下宿の屋根雪降ろしに明け暮れた一週間であった。そしてついに第二講座内のドアの開閉にも支障が出るようになり、とうとう屋根に登ることになった。2メートルを越える積雪との格闘は心身ともに鍛えるには都合が良かったが、はらが減るのはガマンできなかった。理学部にあった食堂のウドンが頼りだったと記憶する。下ろした雪が棟間の庭にうずたかく山になり、壮観そのものであったが講座内のドアが正常に戻ったことは言うまでもない。このとき誰だったか顔も名前も忘れたが屋根から中庭の雪へ飛び降りた学生がいて､なんと危ない事をと､ひやひやしたことも記憶に残る。その時の写真の一枚を掲げておく。大きく中央にいるのは紛れもなく私である。また会誌４号に記事がないのは豪雪の影響であろうと想像されるが、先生方も会誌係にも除雪疲れがあったらしい。また北陸線運行不能で途中の駅等に停車したままの列車内で、人々が遭遇した小事件・エピソードなど開通後に聞いた諸々の逸話なども過ぎてみれば懐かしいものが多い。街中は除雪がはかどらず裏道や路地には２階まで雪がうずたかく残り、一部の家では２階の窓から出入りする有様であった。下宿の屋根雪降ろしは３回にも及び、下ろした雪は排除せねば出入りが出来ず、体力の消毛をどう維持したかよく覚えていない。それでも授業が行われていたかどうかは記憶にない。（写真）屋根雪降ろし隊と雪の山

（不整脈）

１６時最後の岩稜を越え頂上を｣踏んで山小屋に着いた。今夜の宿泊の受付を済ませて広い部屋の片隅に落ち着いた瞬間、胸に何か違和感を覚え胸苦しさを感じて右腕の脈拍をとったら脈がキレギレであることに気づきこの山でどうにかなるのかもしれないとの恐怖を感じた。入口で偶然見つけた信州大学の山岳診療所のカンバンを頼りに急いで扉を叩いたのは何かにすがりたい気持ちからだった。こんな心臓の鼓動はうまれて始めての経験だったからである。医学部の学生らしき人の診断結果は心房性の遅滞・早期鼓動の不整脈で心因性疲労や過労のために起こるものだから、今すぐどうなるということはないであろう。

ゆっくり休んでいてくださいとのこと。何しろ生まれて始めての経験で、常に脈が飛ぶ感覚に慣れないものだから、今にも何か起こりそうな気がして不安いっぱいの瞬間が続いた。とにかくも安静であることと横になったが、今夜も越せなのではないかとの不安が強く、しかも頻繁に起こる脈の不整が気になって少しも眠れない。過労の原因を考えてみると心当りがないわけではない。今度の山行は、信州大学との野球交流戦の翌朝早く会から抜け出して電車とバスを乗り継ぎ“島々から徳本峠小屋(一泊)を越えて、大滝・蝶を越え常念岳（２８５７ｍ）への長旅をこなす一人旅。しかも始めての道であった。しかも悪いことには信大の宿に大事な水筒をわすれてきたらしい。水分といえば、不在の水筒に気づいて途中で買った６個入りの冷凍みかん一袋だけしかない。尾根筋での水不足の不安材料を抱えての強行軍を控えての山旅である。読本峠までは沢沿いで水は豊富だが、尾根すじに出ると水場はない。不備と不安を抱えたまま大滝・蝶を越え、常念へと飛ばしてきた反動が出たのかもしれない。それに信州へ出発する前は野球の練習に加えて、理学部移転作業の責任者グループの一員としての、もろもろの雑用に追い回された日々の連続だったことを思い出し、後悔したのが後の祭りなのかと思われた。実際のところ角間への移転事業が一段落したところ（学科内のへ各部屋への機器の移動や据付具合から移動の方法（整備は各講座で行うとしても)、その順序や積み下ろし作業、自分の研究室・実験室の器具配置などそれに共通設備の工作室関係の移動等雑多な作業に関係した事務手続きなど気を使うことに多く関わっていた。

不整脈は、そんな心の煩雑ささえスッカリ念頭になかった挙句の信州遠征と、山行が続いた勢いであろうと思われる。無事帰宅してからとってもらった２４時間心電図の記録と、解析結果は大事にしまってある。結果を見れば笑い話？に終わったが、恢復して不整がなくなるまで半年を要したことはいうまでもない。

（多発性骨髄腫）

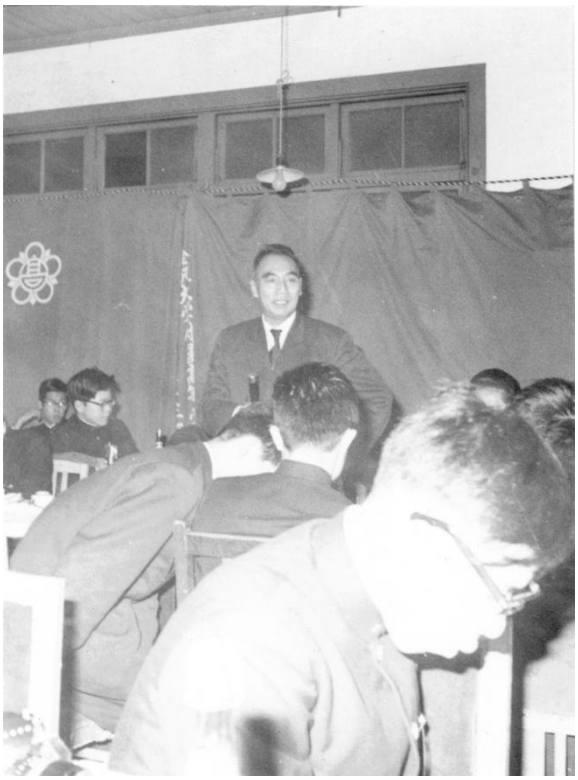
７０才になって野球をするのもしんどくなったと思い、近くの体育館で催されている金沢市スポーツ事業団のテニススクールに参加して体を動かすことを考えた。ここ２・３年血中赤血球の数値が単調に減少して、標準値を切るように変化していることは知っていたが、そこに病気が潜んでいることは気づかなかった。かかりつけ医師は一ヵ月後の再検査を指示していたので、検査を受けたところ更なる減少異状が見つかり、体調の変化と原因究明の調査を金大附属病院で進めるよう指示を受けた。一ヶ月に及ぶ検査の結果、多発性骨髄腫の発症と結論され、このままでは一年の余命と宣告され、入院加療を指示された。空きベッドが出来次第入院と成ったわけです。４ヶ月間の入院加療と薬石巧あり安定状態を取り戻して、通院加療に切り替わりその後２年を経過、現在も血液分析を４週おきに繰り返しながら生きながらえているといったところです。７０歳代が最も多く１０万人に２～３人の患者という稀な存在らしく、難病に指定され補助を受けながら通常の生活(運動は不可）を送っています。

多発性・骨髄腫とは骨髄細胞がある全身の骨の造血細胞（白血球・赤血球・各種抗体製造細胞）中の抗体製造細胞（形質細胞という）の一種がガン化し不要の抗体を多量に生産、他の有効な抗体の生産を阻害し、外界からのウイルス等への抵抗を低下させる一種のガンです。ここ数年来、ガン化を抑制する新薬が数種開発され、ＩｇＧ−κ型といわれる私の血液ガンにもこれら有効な薬の投与によってガン細胞の増加を押さえることが出来るようになり、薬が有効である期間は通常の生活ができるよう保てるようで、今がその期間の中間にあたります。後何年“今”を保てるか分かりませんが、研究者の推測によれば有効期間は５～６年で（１／２）の期間が経過していますから後は押して知るべしと言うことでしょうか。その点では今の期間が一番人生にとって良い期間というベキかもしれません。

同窓会も全学組織に変貌し、物理同窓会も主体性はそのままその一部分に形を変えてい

ます。学内の研究・教育の組織も年ごとに変化し、表面的には昔の面影がありません。物理学も物理関係の同窓会もその中身は変っていかざるを得ません。これから先どうなって行くのでしょうか？　物理学会誌の内容も近頃は難しいことが多く、読んでも理解する以前の状態と後の状態では頭の中は余り変わりません。学会講演の分類・区分けもスッカリ変ってしまいました。隔世の感があります。しかし物理学の基本は変わりません。物理学の基礎をしっかり身に着けて交流を深めることに物理同窓会の意義を見つけて行こうではありませんか。物理同窓会の末永い発展を祈ります。

写真集（ニュートン祭）



(1) ニュートン祭冒頭挨拶する
千田勘太郎先生(故)

(2) 挨拶する同窓会会長（黒澤氏）

(3) 女性軍

(4) 井田(故)・山形(故)先生と学生

(5) 皿回し対抗（至芸：皿渡し）

(6) 豆拾い（松岡先生（故）

(7)　学生バンド演奏

(8)　劇の一場面

写真集（３８豪雪：屋根雪おろし）

(9) 記念写真(9 人の奉仕団)

(10) 中庭に積んだ雪

# 赤レンガ学舎の思い出

前物理学科同窓会長　樋渡　保秋（昭和３９年卒）

金沢大学受験のため深夜大阪駅から機関車準急「ゆのくに号」に乗り早朝肌寒い金沢駅に降り立ったのは既に半世紀以上前の出来事である。「そこに大学があるから」的な至極単純な動機がなせる業とは言え縁もゆかりもない金沢がその後の長い人生の住処になることを予期させる理由など当時の自分には皆無であった。２日間続いた入学試験の印象深さはその後も鮮明に記憶している。赤レンガ学舎の中で一番大きな部屋で厳かに執り行われた試験場のことや試験監督員の一人が入学から卒業するまで一番お世話になったＴ先生であったことなどをはっきりと記憶している。始めて見る金沢の佇まいは関西のそれとは全く異なっていた。特に印象深かったのは広坂通りから兼六公園に進みその右側の緩やかな上り坂のことである。その道の両側は木々でこんもり覆われ、日中でも薄暗く、道の両脇には積雪が残っていた。そしてその道の表面は水をまいたようにうっすらと光っていた。すべてがこれまで味わったことがない風情に心が優しく包まれていくのがとても心地良かった。このような心境になれたのは長い受験生活で疲れた心の襞のせいだけでもない。自分はいつしかこの異国の地が好きになっていたようである。坂を上り切ったところに木造の古い学校らしき建物があったが、それが女子短大であると分かったのは入学後間もない頃である。この話には後日談がある。

４月に入り金沢での学園生活が始まる頃金沢の町はさくらの花が眩しいほどに咲きほこっている１年中で最も美しい時でもあった。大学から斡旋された下宿は工学部に近い上鶴間町にあった。その下宿から大学までは徒歩でも３０分ほどの距離で歩いて通っていた。と言うのも自分には６人兄弟がいて、両親の経済的負担を出来るだけ少なくすることが当時課せられていたからである。教養課程の授業は城内キャンパスで行われた。我々のクラスは数学科と物理学科の混成であったことから、数学科の連中とも親しく付き合った。Ｋ君やＯ君、Ｙ君などとは卒業まで親しく付き合った。物理の仲間からはその後の人生を決定的にさせるような大きな影響を受けることとなった。

２年生の後半から専門課程の授業が四高の赤レンガ学舎で始まり、この頃から同期入学の物理の仲間とは急速に親しく付き合いが始まった。とは言え、仲間の中にも勤勉派と萬派（勉強以外にも関心がある）では付き合いの種類も異なる。Ｍ君やＩ君、Ｋ君、Ａ君らが前者の良き例とすれば別のＭ君やＹ君、Ｔ君らは後者の例である。他には、Ｏ君、Ｈ君、別のＴ君２人、もう一人のＡ君、Ｋ君、Ｍ君、Ｈ君などなどとの思い出も深い。クラスメイトとの色んな会話は特に冬学期間に弾んだことを覚えている。授業が始まる前に教室にクラスメイトが三々五々集まるころ、職員の方がポスト型の大きな石炭ストーブに火種を入れて下さり、それに薪や石炭を加えて火に勢いをつけるのが我々である、授業の始まりを待つ間はいつもストーブの周囲に自然と大勢の仲間が集まり色んな話で盛り上がった、きまってこの間の話を楽しくするリーダ役を担当するのが二人のＴ君やＫ君らである。

授業で思い出すのは、物理以外ではドイツ語と数学である。大学生であることを実感させる内容の授業だったからである。Ｔ先生、Ｓ先生、Ｉ先生、Ｙ先生、Ｃ先生、Ｈ先生から学んだ物理学の必修科目はレベルが高く単位を取るのが難しく、何度も試験をやって頂いてやっとパスするといった曲芸紛いの苦難を味わった輩もいる。同時に、後年他大学出身の研究者仲間と接する機会の都度金沢大学で受けた物理学の授業の質の高さが理解でき、授業を担当された諸先生方に感謝と尊敬の念を覚える。これには学生の向学心も付け加える必要がある。学生の間では自主ゼミと称してアチコチで専門書を輪読して教え合っていた。当時自主ゼミによく使用された寺澤寛一「数学概論」、ディラック「量子力学」、久保亮五「熱力学演習」等はその後を通しても生涯の指導的教科書となった。

卒業の年、Ａ君、Ｈ君、Ｋ君、Ｍ君、別のＡ君は他の大学院へ進学、数人は前年度から新設された金大大学院へ進学、残り約半数は公務員や会社等に就職、それぞれの進路が確定した。３月下旬の卒業式を迎える前の数日間クラスメイト数人で卒業旅行に出かけた。これから始まる未来がどのようなものになるか各人に不安があったがそれには一切触れることなく、互いの健闘を称えることくらいしか言葉が出なかった。心地良い早春の日照りの中でクラス仲間は無邪気にはしゃぎそのひと時を楽しんだ。金沢で過ごした４年間の内容はそれぞれであったが学園生活は胸の中に奥深く刻まれ決して消えることなくすべてがほろ苦くも楽しい思い出であった。卒業旅行から帰って間もなくして春爛漫のスッキリした快晴の日にクラスメイトは卒業式の日を迎えた。卒業式典のあと思い出深い赤レンガ学舎の表玄関左横に建てられていて第四高等学校時代の歴史を感じるバンカラ青年の銅像の前で記念の写真を撮るなどして別れを惜しんでいた。誰彼となく四高寮歌を歌い始めたかとおもうと直ぐに全員の合唱となった。この歌と共に萬の思いがこみ上げて来るのを抑えることはできなかった。

北の都に秋たけて　われら二十の夢数ふ
男女の棲む國に　　二八に帰るすべもなし（以下省略）

＜エピローグ＞　あれから５０年超後の２０１５年３月１４日に北陸新幹線が開通の日を迎えた。東京と金沢を約２時間半で結ぶこの新幹線がもたらす影響は決して小さなものとはならないであろう。５０年前高卒間もない一人の青年が受験のため生まれて初めて訪れた金沢の町の佇まいに感動を覚えたのは大阪から約８時間も列車に揺られて来なければならなかった不便さと無関係ではなかった。この度の北陸新幹線開通によって金沢はもはや不便な地方都市の看板を降ろすことになったのである。金沢は京都や奈良のようなたくさんの訪問者を迎える観光都市を目指すようであるが、金沢大学の学生にも気に入られるような町であってほしい。

# 千田 勘太郎 先生

大橋　信喜美　（昭和４１年卒）

昭和 ４９年早春、６４歳、決して天寿を全うされたとは云い難い齢（よわい）にて、春秋風雪に満ちたであろう生涯を閉じられた千田勘太郎先生のことを思い起こすとき、我々、金沢大学理学部物理学科卒業生は、仄かなノスタルジック(nostalgic)な気分に浸らせられる。

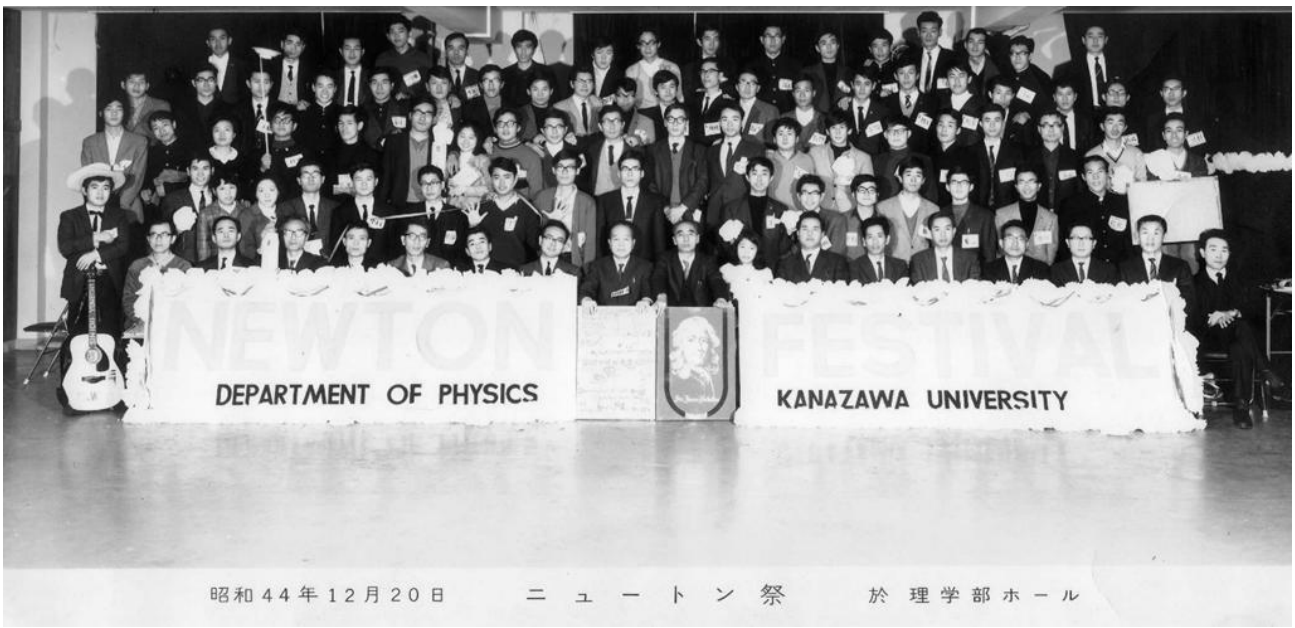
私が、金沢大学理学部物理学科に学んだのは昭和３０年代後半で、其のころ千田先生は５０代前半であられた。その風貌は、まさに、大学教授のそれであられた。一つの時代を象徴する存在感を示して下さった先生であられた。剣道の有段者であられた先生は、一言で、豪傑教授と表現できようか。最近は、このような教授が殆ど見られないと感じるのは、やはり、時代の流れであろうか。

千田先生からは、「電磁気学」と「相対性理論」を受講したと記憶する。物理学科の講義には様々の物理量を表すために、色々な記号が使われるが、先生の使われたのが、ドイツ語に用いられていた いわゆる 亀の甲文字というもので、私などは、それを普通の英文字に直して、ノートに書き取ったのであるが、往々にして、黒板の亀の甲文字が読み取れずに往生したのを懐かしく思い出す。小脇に沢山の原書を抱えて講義室に現れ、風貌に似合わずと云うべきか決して大きくはないお声で講義を進められる。数冊の本を参照しながら、話されたせいか、時折、+、－の符号が合わなくなって、黒板の前で思案にくれられた姿が思い出される（はからずも、母校（金沢大学理学部物理学科）の教壇に立っていたわが身もしばしば同じような状況に陥り、過ぎし日の千田先生のことを思い起こし、苦笑する次第である)。旧制第四高等学校（金沢大学理学部前身校の一）から京都大学理学部へと進まれた千田先生は、そこで、若き日の湯川秀樹博士と出会われている。日本人初のノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士である。その湯川博士とかつて接せられたことが千田先生ご自身の誇りの一つであったろうと推察する。講義中であったろうか、コンパの席の雑談中であったろうか、「湯川さんが・・・」と昔語り風に、若き日の湯川博士のことを、得意そうに話された様が、印象に残る。

人間　年をとるにつれ、昔を懐かしがるものであろうが、やれ研究成果だ　やれ教育効果だのと大学に対しても厳しい眼が注がれている現在から振り返るとき、経済的には貧しかったものの、あの時代の時の流れの豊饒が今は懐かしく思い出される。

千田先生をはじめ金沢大学在学中に私が教えを受けた多くの先生方はすでに鬼籍に入られている。こう云う私とて、あと半年もすれば後期高齢者の仲間入りをする身である。時移り人は去り、遠ざかる昭和の日々への思いが頻りにつのるこの頃である。

（次ページへつづく）




昭和４４年（１９６９年）のニュートン際の様子

中央左が井田光雄先生（誘電体)、右が千田勘太郎先生（核磁気共鳴)。両先生とも、四校から金沢大学への移行当時に多大な貢献をされました。

当時のニュートン際のメイン行事はコンパで、写真はその最後に撮られたもの。コンパの中では、写真に見られるように音楽演奏から皿回しに至るまで、様々なパフォーマンスが披露されていました。今と比べ、芸達者が多かった時代です。他には、講演会や討論会があったと記憶しています。

（編者コメント：写真については８、９頁もご参照ください）

# 現役幹事たちの回想録（思い出話）

幹事　岡本　博之（平成５年修了）
幹事　宮田　敬太郎（平成３年卒、平成５年修了）
幹事　松田　吉弘（平成７年卒、平成９年修了）

**司会：**同窓会の色々な世代の方に、思い出話をいただきたいと思いましたが、今回は時間的な余裕が無く、現役幹事の異なる世代の皆様から思い出話を聞き、紹介したいと思います。まずは皆様の自己紹介と、在学中には何が有った時代かを教えてください。

**岡本：**私は平成元年大学院修士修了、平成５年大学院博士修了の岡本博之です。学部は別な大学出身ですので、いわゆる生粋の同窓生ではありません。同窓会の重鎮である河田先生、大橋先生に色々とご指導をいただくうちに、いつの間にかこの世界に入ってしまいました。そして、いつの間にか金沢が最も長く住む土地になってしまいました。私が在学中のことで一番覚えているのは、昭和から平成に元号が変わったことです。当時官房長官であった、小渕恵三氏が「平成」と書かれた紙を持って記者会見された姿は、良く覚えています。色々な意味で、時代が変わったなーと思わされました。

**宮田：**私は平成３年学部卒、平成５年大学院修士修了の宮田敬太郎です。生まれも育ちも金沢市です。一時期、仕事の都合で金沢から離れていましたが、今は再び金沢在住です。金沢に戻ってきてから、河田先生と岡本さんからお誘いを受けて、幹事を担当させていただいています。在学中に一番覚えていることは、平成４年に日本人初の宇宙飛行士、毛利衛氏が宇宙へ出発されたことでしょうか。物理学を学ぶ一人として、わくわくして見ていました。それと、公務員が週休２日になったことでしょうか。羨ましいなーと思ったものです。もちろん、大学は、まだ土曜日も出勤でした。

**松田：**私は平成７年学部卒、平成９年大学院修士修了の松田吉弘です。生まれは金沢市のお隣の、白山市です。卒業後も、一貫して石川県に関係した仕事に就いています。そんな訳で、金沢大学とは何かと縁も有り、幹事を担当させていただく事になりました。私が在学していたころは、今でも話題になる大きな事件が幾つか有りました。まずは何と言っても、阪神・淡路大震災です。平成７年１月１７日に発生した大規模な地震ですが、石川県でもかなりの揺れを感じた上に、多くの方が亡くなられました。この頃卒業研究の追い込みでしたので、実験をしつつもニュースが気になりました。次は、同じ年の３月２０日に発生した地下鉄サリン事件です。その頃までは、まさか日本でこのような無差別テロが起きるとは予想もしていなかったので、安全神話を覆され大きな衝撃を覚えました。そしてもう一つは、ナホトカ号重油流出事故です。平成９年１月２日に島根県隠岐島沖の日本海で発生した、重油流出事故ですが、北陸の海岸へも重油が流れつき被害がでました。このときは修士の２年生でしたので、ニュースが気になりつつも修士論文執筆に勤しんでおりました。今から思えば、阪神・淡路大震災とナホトカ号重油流出事故の頃から、多くの方が被災現場にかけつけて、ボランティア活動を行うようになったのではないでしょうか。長くなってすいません。

**司会：**ありがとうございます。皆さんが在学された当時の時代背景が良く分かりました。また、金沢とは縁深い方々ばかりですね。さてでは、皆さんが在学中のことで一番の思い出といったら何になりますか。

**岡本、宮田、松田：**それは何と言っても、角間への移転です。

**司会：**皆さん移転に関係しておられる世代ですか。それでは、最初の話題として、移転に関することをお話しいただけますか。

**岡本：**私が金沢へ来た昭和６２年ころは、未だお城の中に大学が有って、移転の話は有りましたが、他人事のように感じていました。しかし、平成元年に文学部・法学部・経済学部が角間地区に移転して、いよいよ理学部移転も現実味を帯びてきたので、実験や研

究はまともにできるか心配になりました。そして、ついに平成４年に教育学部・理学部が角間地区に移転しますが、この準備が大変でした。このころ私は博士課程に在学しておりましたが、実験器具や資料、本等を全て梱包しなければならず、この作業に数カ月かかりました。また、間の悪いことに主に実験に使用していた極低温施設は１年遅れで移転ということになり、２度も引っ越し作業をすることになりました。結局１年以上まともな実験は出来ませんでした。なお、もちろん、引っ越し作業のアルバイト代は頂いておりません。

**宮田：**私も移転の時はちょうどＭ２だったので、マトモにアオリを喰らいました。やはり、実験器具などの梱包作業と角間へ運んでからの開梱作業に駆り出され、半年以上まともな実験はできませんでした。梱包作業も大変でしたが、角間へ荷物を運んでからの開梱作業はもっと大変で、一度バラした装置を再び組み立てて、正常に動作するように調整しなければなりませんでした。この間、単に実験できない、データを取れないというだけでなく、工作室も使えなくなったので実験装置を作れない、工作依頼できないということがありました。それで結局、通常の年よりも切羽詰まって、お正月でも徹夜で実験をすることになり、えらい目に会いました。大学も、もう少し学生のことを考えて欲しいものだと、愚痴をこぼしたものです。これは後日談ですが、大学院を修了してから数年経って研究室に遊びに行った時、まだラベルが貼られたまま開梱されていない段ボールをたくさん見つけました。とりあえず持ってきたけど、結局不要だったなら捨ててくれば、もう少し作業が楽だったよかったなー、などと思い出にふけりました。

**松田：**移転の時、私はまだ大学２年生で、ちょうど教養部から学部に移った時でしたので直接引っ越し作業をしていません。ですので、引っ越し作業についての苦労話は有りません。ただ、城内キャンパス最後のニュートン祭のとき、物理会議室で一斗樽の酒を飲んだことを覚えています。酒の肴は乾物だけで、皆が代わる代わる柄杓で酒をすくい、あおっていたように思います。結局一時間足らずで樽が空っぽになったと思います。

**岡本：**それは私も良く覚えています。樽酒を飲んだのはあの時が初めてで、木の香りがして大変美味しかったのですが、その後廊下や研究室で酔いつぶれている人がたくさんいました。最近の宴会では、なかなか見かけない光景ですね。

**司会：**卒研や修士課程の最中に引っ越し作業にかかった世代と、そうでない世代で、随分不公平感が有るのは聞いたことが有ります。あれだけの所帯を僅かな時間で引っ越されるのは、さぞ大変だったと思います。さて、時系列を少し戻して、城内キャンパスならではの思い出が有りますでしょうか。

**松田：**先ほどもお話ししましたが、一年半くらいしか城内キャンパスに居なかったので、そんなにたくさんは有りませんが、近江町市場とか町中に近いのはありがたかったです。今は無くなりましたが、武蔵が辻にダイエーが有り、近江町市場も夕方行くと野菜や魚をえらく安く売っていたので、宴会の買い出しには便利でした。それと、城内には色々と正体不明な建物や施設が有り、探検出来て面白かったです。

**宮田：**私は自宅から通っていたので城内は近くて便利でしたね。バスでも自転車でも通えましたので。ただ、城内は駐車場が少なかったので、車での通学はできず、冬に雪が降ったとき実験で夜遅くなると、研究室に泊まるしかなかったですね。多くの研究室にはベッドや、布団が用意してありました。

**岡本：**私も自転車通学をしていたのですが、今では考えられないことを平気でしておりました。実は、大きな声では言えませんが、石川門を自転車に乗ったまま通学しておりました。当時は文化財であると意識もあまりなく、単に学校の校門ぐらいの意識でした。今思うと、大胆というか、無謀なことをしていました。

**司会：**城内キャンパスには、もっとたくさん思い出がありそうですが、次は引っ越し後の

角間での思い出を教えて下さい。

**宮田：**先程もお話したのですが、引っ越しのせいで実験が通常の年よりも切羽詰まっていて、しょっちゅう徹夜で実験をしました。角間に引っ越ししてから初めての冬に、徹夜で実験をしたとき、驚愕したことがあります。徹夜の実験が終わっての朝、駐車場に行ったら自分の車の上にだけ雪が積もって、雪だるまのようになっていましたが、周りは綺麗に除雪されていて孤島のようでした。除雪車が、車の回りを囲うように雪を固めていたので、雪を落として脱出するのにえらく苦労しました。

**松田：**初めて角間に行った時、便利な町中から、えらく山の中に移転したなー、と感じました。宴会の買い出しも一苦労でした。というより、角間で宴会をするとバスが無くなるので帰れなくなり、宴会の回数が減りました。当時の角間はふもとに降りて来ても何もなく、コンビニなどは随分後になってからできました。それと、私はちょうど理学部に進学した時だったので、学部の建物についての印象が強いですね。移転当初、理学部の周りは何にも無く、現在のアカンサスインターフェイス（陸橋）も有りませんでした。生協に買い物に行くのも一苦労でした。それと、何故か建物は新しいのに、教育学部の建物等と比べると、何か暗い感じがしました。そして、少し後のことになりますが、４年生になってから卒業研究をしていた冬に、帰りが遅くなることが有りました。そのとき駐車場に行くと、サイドブレーキが凍って外れないことがありました。北陸生まれとはいえ、このような経験は初めてでしたので、大いに困惑しました。

**岡本：**私も雪には悩まされました。私は車での通学ではなく、原付バイクでの通学でしたので、もっと深刻です。専門が物性実験でしたので、実験の時間がなかなかコントロールできず、終わる時間が夜になることが良くありました。そうすると、バスは無くなり冬には自宅に２、３日続けて帰れないことが有りました。研究室に登山用の寝袋を持ち込んで、泊まっておりました。さすがに３日も風呂にはいらないとキツイですね。もっとも、回りの人達の方がもっとキツかったかもしれませんが。

**岡本：**ところで松田さん。私の記憶では、松田さんの世代に、お酒を飲みながら実験をしていた人が居たように思うのですが。

**松田：**居ましたね。「夜中に実験をするとき、どうせ帰れないのだから、飲みながらでないとできるか」と言いつつ、ウイスキーの入ったグラスを片手に実験をしていた人が確かに居ました。でも、飲みながら実験した方が良いデータが出たそうですよ。

**司会：**皆さん角間では雪に悩まされておられたのですね。確かに、杜の里から角間に上がる途中で、急に積雪量が増えますね。正に角間は豪雪地帯です。さて、では最後に、皆さんが在籍されていたころに、何か記憶に残る面白い行事などが開催されていたということが有ったら、教えて下さい。

**松田：**ニュートン際も思い出はありますが、角間に移転してからは少し静かになったように思います。私が記憶に残っているのは、それよりも「河田杯争奪ウォークラリー」でしょうか。経緯は良く知らないのですが、河田修二先生が音頭をとられて毎年数十 km くらいの距離を、クイズなどを解答しながら歩くという行事が有りました。城内キャンパスから犀川を下って内灘海岸まで歩くとか、内灘から海岸沿いに小舞子海岸まで歩くとか、かなりハードだったのを覚えています。途中、「犀川に架かっている御影橋は犀川大橋から何番目か」のようなクイズを解答しながら歩くので、早いだけでも優勝できずなかなか面白かったですね。私は企画を担当したことが有るのですが、コースの選定条件として、車通りが少なく歩き易い道である、途中にトイレが有る、昼食をとれるところや最後の打ち上げを行う場所が有る等が必要で、良い場所を探すのになかなか苦労しました。特に、打ち上げ場所が駅やバス停の近くで無いと、帰れなくなってしまうので、この条件をクリアするのは大変でした。

**岡本：**実はその行事は、私たちの世代が河田先生から仰せつかって始めた行事です。細かい経緯は私も忘れてしまいましたが、能登の柳田村で開催されたウォークラリーに、河田先生と一緒に参加したことが一因だったように思います。教員と学生がともに参加できる、面白い行事を考えようという中で出てきたアイデアでした。当時は若手の鎌田先生等も大変乗り気で、話が一気に盛り上がりました。私も企画をしましたが、コース選定や下見、打ち上げ準備、食材の買い出しは大変でしたね。でも、研究室横断的で色々な人と協力出来て面白かったですね。

**宮田：**私もウォークラリーには何度か参加した記憶があります。内灘海岸で打ち上げをして、酔っ払った集団が大勢、北陸鉄道浅野川線に乗って帰ってきたこととか、獅子吼高原に歩いて登ったこととか、体力的に充実していたから出来たのでしょうね。獅子吼高原に行ったときも北陸鉄道の石川線で白山神社まで行って、そこから歩き始めたのでしたかね。ウォークラリーのときには、北陸鉄道に、大分お世話になりましたね。

**松田：**電車といえば、小舞子海岸の打ち上げで、ひどく酔っぱらって岡本さんと一緒に、北陸線の最終電車で帰ったことが有りましたね。酒乱の人の相手をしていて遅くなったように記憶しています。

**岡本：**その方は今どこで何をしていらっしゃるのでしょうかね。無事な人生を過ごしていらっしゃればよいのですが。

**司会：**さて、話が少々危ない方向に進んできましたので、今回はこの辺りで止めさせていただきたいと思います。面白いお話がまだまだたくさん有りそうですので、また機会が有ればお話を伺わせてください。幹事の皆さん、総会に向けてもうひと頑張りをおねがいいたします。どうもありがとうございました。

旧城内キャンパスでの理学部棟（中庭から）

石川橋から石川門を望む

角間の豪雪（平成１８年２月）

# 物理学教室ニュース

## Ｉ：人の動き（平成１１年９月～平成２７年９月）

① 着任・転入

| | | |
|---|---|---|
| 平成１１年 | １２月 | 出渕卓 助手　着任（理論物理学） |
| 平成１２年 | ２月 | 西川涼子 さん　着任（事務） |
| 平成１３年 | １月 | 布村晃一 さん　着任（技術職員） |
| 平成１３年 | １２月 | 村上敏夫 教授　着任（宇宙物理学） |
| 平成１３年 | ４月 | 駒佳明 助手　着任（理論物理学） |
| 平成１４年 | ４月 | 米徳大輔 助手　着任（宇宙物理学） |
| 平成１６年 | ４月 | 内橋貴之 助手　着任（生物物理学） |
| 平成１７年 | ３月 | 佐藤政行 助教授　着任（非線形物理学） |
| 平成１８年 | １０月 | 永浜祥子 さん　着任（事務） |
| 平成１８年 | １２月 | 藤本龍一 助教授　着任（非線形物理学） |
| 平成１９年 | ３月 | 新井豊子 教授　着任（ナノ物理学） |
| 平成２０年 | １０月 | 曽我之泰 助教　着任（テラヘルツ物理学） |
| 平成２１年 | １２月 | 武田真滋 助教　着任（理論物理学） |
| 平成２２年 | ４月 | 青木真由美 助教　着任（理論物理学） |
| 平成２２年 | ４月 | 古寺哲幸 助教　着任（生物物理学） |
| 平成２４年 | ４月 | 岡林則夫 助教　着任（ナノ物理学） |
| 平成２４年 | ７月 | 渡邉信嗣 助教　着任（生物物理学） |
| 平成２５年 | ４月 | 加藤節圭 さん　着任（事務） |
| 平成２６年 | ４月 | 能村信子 さん　着任（事務） |
| 平成２７年 | ４月 | 石渡弘治 助教　着任（理論物理学） |

② 転出・退職

| | | |
|---|---|---|
| 平成１２年 | １月 | 問谷愛可 さん　退職 |
| 平成１２年 | ３月 | 増﨑克 教授　定年退官 |
| 平成１２年 | ７月 | 伊東美佐子 さん　退職 |
| 平成１２年 | ９月 | 河村真美子 さん　退職 |
| 平成１４年 | ８月 | 駒佳明 助手　転出（マックスプランク研究所） |
| 平成１４年 | １０月 | 水口典子 さん　退職 |
| 平成１６年 | ３月 | 石原裕 教授　定年退官 |
| 平成１８年 | ３月 | 大橋信喜美 教授　定年退官 |
| 平成１８年 | ３月 | 鈴木治彦 教授　定年退官 |
| 平成１８年 | ３月 | 樋渡保秋 教授　定年退官 |
| 平成１８年 | ３月 | 廣瀬幸雄 教授　定年退官 |
| 平成１８年 | ３月 | 川島好枝 さん　退職 |
| 平成１９年 | ３月 | 齊藤究 助教　退官 |
| 平成２０年 | ３月 | 寺尾治彦 准教授　転出（奈良女子大学） |
| 平成２０年 | ９月 | 出渕卓 助教　転出（理化学研究所） |
| 平成２１年 | ３月 | 鈴木恒雄 教授 定年退官 |
| 平成２３年 | ７月 | 堤喜登美 准教授　退官 |
| 平成２５年 | ３月 | 村上敏夫 教授　定年退官 |

② 転出・退職（続き）

| | | |
|---|---|---|
| 平成２５年 | ３月 | 永浜祥子 さん　退職 |
| 平成２６年 | ３月 | 加藤節圭 さん　退職 |
| 平成２７年 | ３月 | 能村信子 さん　理工系事務部学生課教務係へ転出 |

③ 訃報

| | | |
|---|---|---|
| 平成１５年 | ８月 | 小川莞爾 助手 |
| 平成１７年 | ９月 | 山崎正利 元教授 |
| 平成１７年 | １０月 | 松岡愼一 元教授 |

## Ⅱ：組織の変更（抜粋）

| | | |
|---|---|---|
| 平成９年 | ４月 | 自然科学研究科改組（区分制博士課程）、博士前期課程設置 |
| 平成１０年 | ４月 | 自然科学研究科改組(博士後期課程物質科学専攻より物質構造科学専攻へ) |
| 平成１６年 | ４月 | 自然科学研究科の部局化(自然科学研究科の専任教員の他、理学部、薬学部、工学部の全教員が自然科学研究科所属) |
| 平成２０年 | ４月 | **3 学域 16 学類発足（理学部・工学部が理工学域へ）** |
| 平成２４年 | ４月 | 自然科学研究科改組(博士前期課程の数物科学専攻等９専攻を６専攻へ) |
| 平成２６年 | ４月 | 自然科学研究科改組（博士後期課程を数物科学専攻等６専攻へ) |

## 同窓会学術特別賞（平成２２～２６年度分）

物理学科同窓会から毎年、優秀な卒業研究を行われた物理コース卒業生数名に、同窓会学術特別賞を授与しております。各年度の受賞者と研究タイトルを以下に示します。

| 年　度 | 氏　名 | 研究室 | 研究タイトル |
|---|---|---|---|
| 平成２２ | 福田 真悟 | 生物物理 | 蛍光顕微鏡複合型高速 AFM の開発 |
| | 金古 岳史 | テラヘルツ領域物理学 | 非中性プラズマの閉じ込め時間評価 |
| | 多谷 知哉 | 理論物理学 | コールドダークマターの宇宙観測から予測される質量 |
| 平成２４ | 北村 裕衣 | ナノ物理学 | 極低温超高真空走査型トンネル顕微鏡の開発 |
| | 阿部 晃平 | ナノ物理学 | 大気圧環境制御下 FM-AFM の環境改善と性能評価 |
| | 内田 遥平 | 分子物理学 | N メチルアセトアミドの N-D 種のフーリエ変換マイクロ波分光 |
| 平成２５ | 橋本 遼太 | ナノ物理学 | 音叉型水晶振動子力センサー・探針の作製と評価 |
| | 坂井 涼 | 理論物理学 | モンテカルロ・シミュレーションによる４次元 φ4 Theory の triviality の検証 |
| | 北 浩也 | 分子物理学 | NMF の零点振動が電子的構造に与える影響の考察 |
| 平成２６ | 稲村　竜 | ナノ物理学 | 非接触原子間力顕微鏡におけるエネルギー散逸機構の研究 |
| | 裏　雄太郎 | 超低温 | RTAl(R=Gd,Dy,Ho,Er ; T=Ni,Cu)の磁気熱量効果の研究 |
| | 三ツ村　毅 | 分子物理学 | 超音速ジェット-フーリエ変換マイクロ波分光計のための高速ノズルの開発 |

特別賞授与の様子は、同窓会ホームページにも掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

# 会計報告（平成２２～２７年）

先回総会（平成２２年１１月６日）以降の会計報告は以下の通りです。

| 年　度 | 収　入 | | 支　出 | |
|---|---|---|---|---|
| 平成２２年度 | 繰越金 | ¥339,850 | 総会費 | ¥717,660 |
| | 総会収入 | ¥762,581 | | |
| | 利子 | ¥139 | | |
| | 小計 | ¥1,102,570 | 小計 | ¥717,660 |
| | | | 繰越金 | ¥384,910 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成２３年度 | 繰越金 | ¥384,910 | 同窓会学術特別賞 | ¥9,000 |
| | 小計 | ¥384,910 | 小計 | ¥9,000 |
| | | | 繰越金 | ¥375,910 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成２４年度 | 繰越金 | ¥375,910 | 同窓会学術特別賞 | ¥9,000 |
| | 利子 | ¥89 | | |
| | 雑収入 | ¥1,000 | | |
| | 小計 | ¥376,999 | 小計 | ¥9,000 |
| | | | 繰越金 | ¥367,999 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成２５年度 | 繰越金 | ¥367,999 | 同窓会学術特別賞 | ¥8,505 |
| | 小計 | ¥367,999 | 小計 | ¥8,505 |
| | | | 繰越金 | ¥359,494 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成２６年度 | 繰越金 | ¥359,494 | 同窓会学術特別賞 | ¥8,748 |
| | 利子 | ¥59 | | |
| | 小計 | ¥359,553 | 小計 | ¥8,748 |
| | | | 繰越金 | ¥350,805 |

上記の通り報告いたします。

平成２７年１０月３１日
金沢大学理学部物理学科同窓会幹事会

# 会則変更のお知らせと新会則の案

大学の組織改革、同窓生の教員の退職、等の理由により、現行同窓会会則の内容と現状との間に齟齬が生じて参りました。つきましては、現状に合わせて同窓会会則の大幅な変更を行わせていただきたく、幹事会にて下記のような改訂案を作成いたしました。この案は、平成２７年１０月３１日の同窓会総会にてご審議をいただく予定です。なお、総会において最終的に決定された新会則は、ホームページに掲載させていただきます。

## 金沢大学物理学同窓会会則（改正案）

（名称）
第１条　本会は金沢大学物理学同窓会と称する。

（住所）
第２条　本会は主たる事務所を石川県金沢市角間町金沢大学理工学域数物科学類物理学コース事務室に置く。

（目的）
第３条　本会は会員相互の親睦と連携を図り、母校の物理学コースの教育に寄与することを目的とする。

（事業）
第４条　本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。
１　総会の開催
２　会報等の発行、会員名簿の管理及び Web ページ等による広報活動
３　その他本会の目的を達成するために必要な事業

（会員）
第５条　本会は次の会員で組織する。
１　正会員
（イ）金沢大学理学部物理学科卒業生
（ロ）金沢大学大学院理学研究科（物理学専攻）修了生
（ハ）金沢大学大学院自然科学研究科（物理学関連講座）修了生
（ニ）金沢大学理工学域数物科学類物理学コース卒業生
（ホ）（イ）～（ニ）に該当しない者で金沢大学理学部物理学科、大学院理学研究科（物理学専攻）、大学院自然科学研究科（物理学関連講座）、理工学域数物科学類物理学コースに在籍したことのある者のうち入会を希望する者（博士課程在学生を含む）
２　賛助会員
金沢大学理学部物理学科、大学院理学研究科（物理学専攻）、大学院自然科学研究科（物理学関連講座）、理工学域数物科学類物理学コースの現職員および旧職員
３　準会員
金沢大学理工学域数物科学類物理学コース在学生、金沢大学大学院自然科学研究科（物理学関連講座）在学生及び会長の認めた者

（役員の定数）
第６条　本会には次の役員を置く。
１　会長　１名
２　幹事　若干名
３　準幹事　１名
４　学生幹事　若干名

（役員の職務）
第７条　　会長は本会を代表し会務を統理する。幹事は幹事会を組織し、庶務、会計、Web管理、名簿管理等の会務を行う。準幹事は準会員との連絡調整等、会の運営に協力し、助言を与える。学生幹事は準幹事を補佐し、会の運営に協力する。

（役員の任期）
第８条　会長及び幹事の任期は５年、準幹事の任期は２年並びに学生幹事の任期は１年とし、重任を妨げない。

（役員の選任方法）
第９条　会長は正会員中より幹事会が推薦し、総会の議決をもって選任する。幹事は正会員中より互選し、総会の議決をもって選任する。準幹事は理工学域数物科学類物理学コース長、もしくはその代理の者をもって充てる。学生幹事は物理学コースの学生若しくは自然科学研究科の大学院生の中から準幹事が推薦し、会長が任命する。

（総会）
第１０条　総会は会長が招集し、定期総会は原則として５年に１回、臨時総会は必要に応じて開催する。

（収入）
第１１条　本会の収入は次のものによる。
１　会費
２　特別会費
３　寄付

（予算及び決算）
第１２条　本会の予算および決算は会計を担当する幹事が幹事会の承認を得て、総会で報告する。

（会計年度）
第１３条　本会の会計年度は総会から総会の５年間とする。

（支部の設置）
第１４条　会員は必要に応じて支部を設ける事が出来る。ただし、支部を設ける場合は、事前に幹事会に支部の活動方針等を報告することとする。

（支部の例会）
第１５条　支部は例会を開催し、例会の状況報告を幹事会に送付する。

（会費の賦課及び徴収方法）
第１６条　会費及び特別会費の金額については幹事会で決定する。会費は卒業若しくは修了時に新たに入会した正会員に賦課することとし、本会の指定した口座に振り込むものとする。特別会費は必要に応じて幹事会の承認を経て正会員に賦課することとし、総会開催にあわせて徴収するものとする。

（会則の変更）
第１７条　本会会則は、総会出席者の過半数の承認によって変更することが出来る。

附則
１　この会則は、総会の承認のあった日（昭和３３年４月１日）から施行する。
２　一部改正（昭和３５年７月）
３　一部改正（昭和４２年６月）
４　一部改正（昭和６３年３月）
５　一部改正（平成２７年１０月（予定））

# 同窓生名簿

## 名簿の記載情報について

今回発行いたしました会報では、同窓生の個人情報保護のため、ご提供いただきました情報の内、住所を市町村または区まで掲載させていただきました。ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。もし、記載内容に間違いがございましたら、何卒ご容赦ください。その節は、本会報最終頁に記されております連絡先まで、ご連絡をいただけますと、ありがたく存じます。また今後、**引っ越し等によりご連絡先が変更になった場合につきましても、ご連絡をいただけますようお願い申し上げます**。さらに、先輩、同級生、後輩、の連絡先の変更や、情報の欠落等にお気づきの際にも、ご連絡をいただけますと、大変助かります。

本同窓会の財政状況は逼迫しておりますので、通信費を極力節約したいと考えております。そこで、**ご連絡先の情報として、電子メールアドレス**をお教えいただきますと、大変助かります。何卒ご理解いただき、ご協力をお願い申し上げます。

お知らせいただく情報は、守秘義務を負う同窓会事務局が厳重に管理し、会員の親睦と連携をはかる目的以外には使用しません。名簿に関する疑問点については、何なりとお問い合わせください。今後も、同窓生の皆さまのご協力を、何卒お願い申し上げます。

## 同窓生のご連絡先情報提供のお願い

今回の総会開催にあたり、ご連絡先が不明であるため、案内状をお送りすることができなかった同窓生が多数居られます。その方々は、次頁以降に掲載されております**名簿の現住所が空欄**になっております。もし、当該同窓生の情報をお持ちの方が居られましたら、本会報最終頁に記されております連絡先までご連絡をいただけますと、ありがたく存じます。担当者より当該同窓生に連絡をとらせていただきます。

## 同窓会役員紹介

| | | |
|---|---|---|
| 同窓会長 | 安達　正明 | 昭和４９年卒 |
| 相談役 | 堂井 吉昭 | 昭和２９年卒 |
| 相談役 | 井上 三郎 | 昭和３４年卒 |
| 相談役 | 河田 脩二 | 昭和３４年卒 |
| 相談役 | 樋渡 保秋 | 昭和３９年卒 |
| 相談役 | 大橋 信喜美 | 昭和４１年卒 |
| 会計担当幹事 | 川本　康詔 | 平成５年卒、平成７年修了 |
| 広報担当幹事 | 宮田　敬太郎 | 平成３年卒、平成５年修了 |
| 名簿担当幹事 | 野上　直樹 | 平成７年卒、平成９年修了 |
| 総務担当幹事（学外） | 松田　吉弘 | 平成７年卒、平成９年修了 |
| 総務担当幹事（学内） | 古寺　哲幸 | 平成１３年卒、平成１５年修了 |
| 総務担当幹事（学内） | 岡本　博之 | 平成１年修了 |

## 編集後記

本会報の発行にあたり、ご寄稿いただいた、同窓会長はじめ同窓生諸氏に、感謝を申し上げます。中でも、ご多忙な中、最先端の物理学に関する研究についてご執筆いただいた、金沢大学「新井豊子教授」には深く感謝を申し上げます。

本会報には、不行き届きな点も多々有ろうかと存じますが、何卒ご容赦いただき、同窓生が集まった際、話題提供の一助になれば幸いと考えております。(幹事一同)

「現役幹事たちの回想録」を読んでいて、学生時代を思い出しました。移転時は４年生でしたが、移転後もしばらく自転車通学で、汗だくの体を冷やすために、河田先生の誘電体研究室の冷凍室に入れてもらっていたことを思い出します。幹事会で角間に向かう時は旭町の下宿前を通ったり、幹事会後は学生時代によく通った店で食事をしたりと、学生時代を思い出していましたが、大学近隣のあまりの変わりようにいつも驚いています。(川本)

Web 担当幹事です。主に同窓会 Web サイトの構築、運用、記事作成等行っています。色々と記事等書いておりますと、学生、院生時代の思い出もどれだけか蘇って参ります。Web サイトはレンタルサーバを借りて運用しておりますので、その支払いのためにも、どれだけか寄付を頂ければ幸いであります。(宮田)

今回、「現役幹事達の回想録（思い出話)」が掲載されておりますが、読み返してみて、河田杯争奪「ウォークラリー」を詳細に思い出しました。コース選定・下見、バーベキューの準備、酒や食材等の買い出し等、色々と準備は大変でしたが、とても楽しい時間を過ごしたことを思い出します。(松田)

昨今、北陸新幹線の開業とともに金沢が紹介されることが多くなりました。同窓生諸氏におかれても、これらの事象、現象が、諸般のポテンシャルバリヤーを乗り越え、思い出の地に再び足を運ばれるドライビングフォースとなることを期待しております。(岡本)

## 同窓会連絡先

物理学科同窓会 HP　　：http://kanazawa-u-physics-dousou.jp/
同窓会メールアドレス：renraku@kanazawa-u-physics-dousou.jp
〒９２０－１１９２　金沢市角間町
金沢大学自然科学５号館４階物理事務室内　物理学科同窓会事務局